

# 天地人

第8号 No.8

November 2009

ISSN 1882-3580



水田灌漑のために地下水を汲み上げている様子。三江平原では、1990年代以降に急激に水田面積が増加し、灌漑用の地下水を大量に汲み上げるようになった。年々地下水水面が低下しており、それにともなって井戸の深さも深くなっている。2009年7月大西健夫撮影

## Contents

### 中国環境問題への歴史資料的貢献の模索

高田 幸男 — 2

### 東アジア内海の新石器化と現代化

榎林 啓介 — 4

### ホルチン沙地東部における緑化活動

成田 正之 — 6

### 台湾における環境史研究

劉 士 永 — 8

### 歴史上の黄海・渤海における真鯛資源量の変動と原因

李 玉 尚 — 10

### 天地と対話する身体

真 柳 誠 — 11

### 山形と中国ドキュメンタリー

藤 岡 朝 子 — 12

### 彼女は安価な労働力になりたくなかった

馮 艶 — 14

### 消えゆく水と現れる碑

井 黒 忍 — 16

お知らせ — 16

### 摸索历史资料对中国环境问题贡献的方法

高田 幸男 — 2

### 东亚内海の新石器化と現代化

榎林 啓介 — 4

### 科尔沁沙地東部の緑化活動

成田 正之 — 6

### 台湾環境史研究簡介

劉 士 永 — 8

### 历史上黄渤海真鯛资源数量的变动及原因

李 玉 尚 — 10

### 与天地对话的身体

真 柳 誠 — 11

### 山形与中国纪录片

藤 岡 朝 子 — 12

### 她不想成为廉价劳动力

冯 艶 — 14

### 水消碑現

井 黒 忍 — 16

最新动向 — 16

### Searching for ways in which historical materials can contribute to resolving China' environmental problems

TAKADA, Yukio — 2

### Neolithization and modernization

MAKIBAYASHI, Keisuke — 4

### Our greening activities at the eastern part of Horqin Sandy land

NARITA, Masayuki — 6

### A brief overview of the study of environmental history in Taiwan

LIU, Shi-yung — 8

### A historic look at quantitative change in the resources available to the Red Sea Bream, Pagrus Major, in the Bo Sea and the Yellow Sea and at the causes of this change

LI, Yu-shang — 10

### Bodies in dialogue with heaven and earth

MAYANAGI, Makoto — 11

### Chinese documentaries at the Yamagata International Documentary Film Festival

FUJIOKA, Asako — 12

### She didn't want to be part of cheap labor

FENG, Yan — 14

### Disappearing water and appearing steles

IGURO, Shinobu — 16

Currents — 16

# 中国環境問題への 歴史資料的貢献の模索

東洋文庫現代中国研究資料室／明治大学文学部 高田幸男



人間文化研究機構「現代中国地域研究拠点連携プログラム」も、発足以来3年目に突入した。東洋文庫現代中国研究資料室は、日本を代表するアジア専門図書館・研究所である財団法人東洋文庫の拠点として、拠点の研究テーマに「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」を掲げ、この間、現代中国研究に資するデジタル・ライブラリーの構築などを進めてきた。現在、新規購入資料の目録・解題の作成・ネット上への公開や、国立情報学研究所が運営するNACSIS Webcatへの東洋文庫所蔵資料の登録及び書誌情報作成などに取り組むほか、各種資料に関するワークショップを開催し、資料活用のネットワーク化も進めている。

さて、これから取り組むべき課題の一つに、新規購入の資料のみならず、東洋文庫に所蔵されている膨大なアジア関係の歴史資料を、いかにして現代中国研究に活用できるようにするか、という問題がある。Webcatによる蔵書の横断検索が可能になっても、それは著者名や書名レベルであり、それだけでは、たとえば東洋文庫が誇る地方志や族譜のコレクションに含まれている膨大なデータを容易に活用できない。

そうしたなか、2010年1月30日・31日、現代中国研究部会の第3回国際シンポジウムが、「環境問題：現代中国の未来可能性」をテーマに京都で開催されることになった。

環境史は中国史学において比較的新しい分野であり、とくに近現代史研究においては、実績のある研究者は数人という状況であり、現代中国研究資料室のメンバーにも環境史の専門家はいない。そうした状況で、資料室としてこのテーマにどう取り組むか協議を重ねた。その結果、東洋文庫は現代中国の環境問題に歴史資料の面から貢献できるということになり、立教大学の上田信教授、東洋文庫研究員でもある東京外国語大学のクリスチャン・ダニエルズ教授をお招きして、9月18日に中国環境史ワークショップ「中国環境史の視角とその史料をめぐって」を開催するにいたった。お二人は、いずれも中国環境史研究において豊富な成果をお持ちで、当日も、それぞれ、マクロの視点から見た交易と生態環境の変遷、およびミクロの視点からの18～

19世紀雲南の天然資源保護・管理という、非常に興味深い報告をされた。こうした環境史研究の可能性を認識すると同時に、資料の活用という点では、「環境問題」という視点を持たない記録者が残した資料から、有効な情報を引き出すことの難しさも感じた。

私事になるが、1987～89年、2001～02年と南京に滞在した際、都市近郊に意外と自然が残されていると感じた。80年代には、南京郊外の紫金山でシカを見かけ、同じく長江沿岸でカワセミを、常熟郊外の虞山の茶畑で野ウサギを見かけた。また南京―上海間の車窓からキジを見つけたこともある。このときはすぐそばで農夫が気づかずに作業をしていた。2001年にも南京の紫金山でクワガタを見つけ、長江に近い工場地帯でカワセミを見かけた。家族も、上海動物園のトラ園でカワセミのダイビングを見たという。武漢の東湖公園にはホタルが舞っていた。だが、中国人の友人たちからは、こうした身近な自然の話聞いたことがない。自然にあまり関心がないか、そんな自然は失われてしまったものと思いつているのかもしれない。こうしているうちに、急速な開発で貴重な自然が本当に失われてしまうのである。

そう考えると、歴史資料の環境に関する記録は、あくまで記録者の「視野」にはいったものにすぎず、当時の人間の環境への関わり方を反映したものではあるが、環境実態の解明には十分な検証をおこなう必要がある。こうしたことも含め、歴史資料の活用の模索を続けていきたい。



中国環境史ワークショップの様様

摘要

# 摸索历史资料对中国环境问题贡献的方法

东洋文库现代中国研究资料室 / 明治大学文学部 高田幸男

东洋文库现代中国研究资料室作为代表日本的亚洲专业图书馆及研究所——财团法人东洋文库的基地，提出基地的研究课题——“促进现代中国研究资料的收集及利用，推动现代中国资料研究”。最近，开展了有助于现代中国

研究的数字图书馆建设等工作。目前，针对中国环境问题，还召开了有关中国环境史和历史资料的研讨会，有效利用东洋文库收藏的地方志等庞大的历史资料，摸索能够有所贡献的方法。

Abstract

## Searching for ways in which historical materials can contribute to resolving China's environmental problems

Document Center for China Studies, the Toyo Bunko/School of Arts and Letters, Meiji University

TAKADA, Yukio

As a research base of the Toyo Bunko (Oriental Library), Japan's representative research institution and library for Asian studies, the Toyo Bunko Documentation Center for Chinese Studies focuses on the theme of "promoting the use and collection of modern Chinese research materials and encouraging research on modern Chinese archival materials". In recent years, the Center has been moving forward on projects

such as the construction of a digital library for use in research on modern China. Currently, the Center is seeking ways to also contribute to the resolution of Chinese environmental problems by making use of Toyo Bunko's extensive collection of local histories and other materials and holding workshops concerning China's environmental history and historical materials on China's environment.



東洋文庫現代中国研究資料室のホームページ

# 東アジア内海の新石器化と現代化 景観形成史（中国ワークグループ）



総合地球環境学研究所 榎林啓介

現在に存在する景観は、長い歴史のなかで形成された結果であり、未来（将来）を含めた時間軸のなかでは途中でもあります。つまり、現在の景観は動的なものであり、それは過去から未来へと進むものと言えます。しかし、その方向性は現在に居るだけでは知ることができず、時間軸を客観的に俯瞰しなければ見えてこない難しさがあると思います。そこで「景観史」という方法論を本プロジェクトでは導入しています。

さて、本プロジェクトでは、こうした問題意識と方法論のもと、東アジアの8つの内海地域を研究対象として1万数千年前から現在までの景観史、つまり人と自然の関係史を読み取ろうとしています。内海というのは、沿岸部などの水辺環境で外海と陸地との接点でもあるため、多様な自然が形成されるなどして人の活動が盛んであったところです。ですので、自然が変化するとき人がどのように適応したのかもよく分かる場所でもあります。そこで、日本列島および大陸・半島の沿岸に8つの対象地域を設定し、中国では長江下流域を選んでいきます。具体的には、長江河口域・太湖周辺・杭州湾岸です。

近年、急速に経済成長を遂げる中華人民共和国ですが、その中心地のひとつに、ご存じのように上海があります。また、上海周辺には、蘇州、無錫、杭州、寧波などがあり、それらは大都市圏を形成しつつ日々「発展」をしています。この地域の歴史は古く、現在、世界史上もっとも古い農耕（稲作）起源地のひとつでもあります。今から約7000年前にすでに稲作を行っていた河姆渡文化が花開き、稲作を基盤とした社会が拡大成長し断続しながらも後世の呉や越の勢力となり、現在の上海大都市圏につながっていくと説明されてきたと思います。しかし、こうした理解では、自然との関わりをもとに説明していこうとする視点が少なく不十分です。これは、これまでの歴史学が、人と人との関係にのみ注目してきたことに由ります。

ところで、稲作は人が水をめぐる環境のなかで発見・形成してきた食料獲得方法であり、そのメカニズムを理解することは、人と自然との関係を理解するこ

とにつながります。

この点でひとつ面白いことがわかりつつあります。さきほどお話をした河姆渡文化は、より具体的な実態が解明されつつあります。それは、米だけでなく、ドングリなどの堅果類、菱、豆、鹿、猪（豚）、鯉、鮒など多種多様な食料を網羅的に獲得する世界でした。自分たちの目の前にある自然環境を広範囲に活用しようとする経済で、様々なカテゴリーの動植物を試行錯誤しながらも十分に利用しようとする姿です（中村ほか2008、中村2009）。

こうした研究は、興味深い方向へ行こうとしています。野生イネが生えているところは水辺です。そのイネをカヌーを使って採集した可能性があります（D. Fuller *et al.* 2008）。これは魚と人の関係を示しています。魚を捕りながら、そばに食べられそうな植物、つまり後に「米」になる野生イネを発見したのです。さらには、現在につながる養魚がすでに存在することも実証されています（中島2009）。食料となる動植物をひとつひとつ生業サイクルのなかに取り入れ、総体として人の社会が持続できる経済を模索したのです。

約7000年前のこうした人と自然との関係で形成された世界は、現在、全く異なる論理であるグローバル化された経済論理のもとで、大規模に改変が行われています。こうした大きな環境変化の時代だからこそ、人と自然の関係を俯瞰できる景観史の立場から見直していくことで、まだ分かっていないメカニズムを解明し、そして次代のために貢献できればと思っています。

### 【参考文献】

- 中村慎一・榎林啓介・村上由美子・小柳美樹 2008 「田螺山遺跡」『考古学研究』第55号第3号
- 中村慎一 2008 「稲作と稲作文化の始まり」『ユーラシア農耕史』第1巻 臨川書店
- D. Q. Fuller *et al.* 2008 Evidence for a late onset of agriculture in the Lower Yangtze region and challenges for an archaeobotany of rice. *Past Human migrations in East Asia*. London
- 中島経夫 2009 「由鯉科魚類咽歯遺存遠観史前時代漁撈同稲作関係」『余姚田螺山遺址自然遺存的総合研究』文物出版社

本研究项目是：用景观史的方法论阐明人类走过来的历史，而且我们期待通过这种历史发展方向性的解读可以对解决现在以及未来的环境问题做出贡献。我们在东亚布置了8个属于沿岸地区的研究现场，在中国挑选了长江下游的长江河口地区、太湖周边、杭州湾等。该地区有悠久的历史，是世界上最古老的农业（种稻）发祥地之一，距今

约七千年前开始的水稻耕作是人类生活对自然适应的结果。但是现在我们看到中国的高度经济发展依赖的是在这块土地上从未实用过的经济全球化理论，并且这些变革是以空前的大规模进行着的。在这个社会变革与环境变化同步进行的时代大背景下，我们的研究项目尝试着使用景观史的研究方法，对人类和自然的关系进行深入的分析 and 阐明。

Abstract

Neolithization and modernization:

Landscape history of the East Asia Inland Seas (China Workgroup)

RIHN MAKIBAYASHI, Keisuke

This project reveals human history by using a methodology of landscape analysis, and so contributes to recognition and resolution of present and future environmental issues. One project field site is the lower Chang Jiang River basin, an area in which rice cultivation began approximately 7,000 years ago. It is believed that adaptation to the riparian environment enabled the developments of rice cultivation

systems. Thus, rice cropping developed as a particular expression of human-nature interactions. Development in contemporary China is occurring according to a global economic logic. We hope that consideration of the historical background of human-environmental interactions in China from a perspective of landscape study will contribute to better methods for environment protection for the next generation.



浙江省田螺山遗址远景 (中村慎一氏提供)



2本の高架を同時建設 (蘇州)



水辺の景観 (蘇州の農村)



水質改善のための取り組みを紹介 (昆山)

# ホルチン沙地東部における 緑化活動



FoE Japan 成田正之

内モンゴルで緑化活動を始めて8年が経ちました。砂漠緑化の技術や経験は全くありませんでしたが、長年の経験と実績のあるNGO「沙漠植林ボランティア協会」に指導を仰ぎ、実践から学ぼうという気持ちだけで乗り出しました。活動場所は内モンゴル自治区東南端のホルチン沙地。日本にいちばん近い沙漠化地域といわれています。最初の活動地、ダチンノール村<sup>(※)</sup>で実践した緑化手法を紹介します。

- ・家畜が入らないように柵で囲う。
- ・灌水のため井戸を数ヶ所掘る。
- ・数種類の苗木を混ぜて植える（ポプラ、榆、松、ア

カシア、カラガナなど）。

- ・草が自生し、草に覆われることで砂が固定される。
- ・回復後は畑や牧草地に。半農半牧の生活に役立てる。

数十年前まで森や草原だったことから、地下水は豊富な地域です。年間降水量は400ミリ。果樹、野菜、水稲も可能です。木をたくさん植えて森をつくろうというのではなく、“疎林育草”＝疎らに植えて草を育てるという考え方です。回復後は畑にするなど生活メリットにもつながることが、住民が自ら取り組み、砂漠化防止を定着させる大事なポイントだということ学びました。



ポプラ列の間にトウモロコシ畑

ここではおよそ3年で緑が戻り、田畑の利用も始まりました。自然の回復力に驚き、感激しました。でもそれは活動地55ha(1km×550m)のこと。村落では、家や畑が砂に埋もれることもあり、開始から2年の間に60戸あった世帯は38戸に減りました。砂漠化の厳しさを思い知った出来事でした。

活動3年目。移住問題が落ち着き、残った住民はここでがんばると緑化に熱心になりました。活動地を50ha拡張し、順調に緑を取り戻しています。最近になって住民に言われました。「最初はここを囲って木を植えることに反対だった。けれど今、こんなに緑が増え、畑もでき、とてもうれしい。村のみんなも喜んでるよ」。とても嬉しい言葉でした。

一方で、この緑をどう維持するかが課題です。とくに柵の管理に悩まされています。押し寄せる砂に飲み込まれたり、砂が流されて倒れるなど、柵が一部でも壊れると家畜が入り、草や苗木を食べてしまいます。家畜の餌に困った住民が意図的に入れることもありました。

また最近では、社会情勢を背景に住民の緑化意識に変化を感じるようになりました。国の政策をみると、90年後半以降に砂漠化が大きく認識され、防砂治沙法を始め、草原法、退耕還林条例などが相次いで改正・施行されました。これらの施策は、実施者(個人)への食料・現金補助の奨励策や、木を植えて活着すれば「林権証」など個人の権利が与えられるため、意欲的に植樹するようになりました。さらに経済発展が波及し物価上昇も顕著です。材木の価格は2倍になり、砂漠緑化というより“用材林育成”の関心が高まりました。これまで私たちが実践した“疎林育草”の手法は、広く受け入れられ



話合いに集まった村の人たち

成果も見られましたが、近年の政府指導や経済情勢から、用材として売れるポプラをたくさん植えたいという考えが強まっています。今後は、こうした活動を取り巻く要素を考慮し、支援先それぞれの状況に合った緑化手法を組み立て、活動を続けていきます。

※所在地：内蒙古自治区 通遼市 庫倫旗 額勒順鎮 敖倫嘎查 达沁淖尔小组 東経 121° 41.003' 北経 42° 57.647' 付近



活動地拡張のための現場調査

# 台灣環境史研究簡介



中央研究院台灣史研究所 劉士永

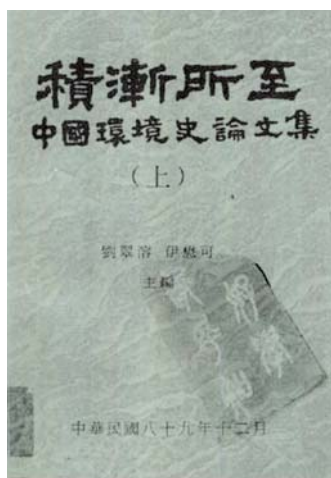
約莫在 1970 年代，環境史研究已然在西方學界成形；但對於發展中國、臺灣環境史而言，卻到 1990 年代伊懋可 (Mark Elvin) 提出研究建言後才略顯契機。在發展中國環境史的過程中，有數場關鍵性的會議不容小覷。1993 年 12 月，伊懋可與劉翠溶院士於香港舉辦第一屆中國環境史國際會議，會後出版中 / 英文論文集《積漸所至：中國環境史論文集》(圖一)與 *Sediments of Time: Environment and Society in Chinese History*。其第二屆國際會議於 2002 年 11 月，由劉翠溶在中央研究院台灣史研究所籌備處舉辦。該場會議計有 21 篇論文發表，分屬九大主題：(1) 水利環境變遷，(2) 工業與環境，(3) 環境變遷之回顧，(4) 影像資料的利用，(5) 土地利用與環境變遷，(6) 族群與環境，(7) 疾病與環境，(8) 自然災害與重建，(9) 生態研究與政策。臺灣環境史研究的風尚亦刺激了對岸學界；天津南開大學王利華等人組織〈中國歷史上的環境與社會〉研討會，在 2005 年 8 月進行三天之研討，部份論文於 2007 年集結成冊由北京三聯書店出版。2006 年 11 月，劉翠溶院士再於臺灣史研究所組織國際會議；共計發表 34 篇論文，內容一如往例具有跨學科對話特徵。其中 21 篇論文經檢選修改，集結出版《自然與人為互動：環境史研究的視角 (*Interactions of Nature and Humans: Perspectives of Environmental History*)》(圖二)。

## 台灣環境史研究現況：以疾病作為觀察指標

由於寄生蟲是造成人類疾患的重要原因之一，其形

態雖異但都須存在於自然環境，方得感染人類致病。寄生蟲經常以其他的動植物為宿主，透過這些宿主所產生之環境條件以維繁衍。近來西方學界已經注意到，人類對於自然的開發利用往往造成顯著的环境破壞與物種滅絕；環境研究者因此有更多的證據去呼籲關注自然環境當中，寄生蟲病、宿主與人類三者間存在的連鎖反應關係。是以，寄生蟲與宿主間的關係不是一成不變，反而經常是動態性的。基於此等假設，2005-2007 年間，劉士永針對日治時期臺灣西部平原的瘧疾與血絲蟲發病狀況，指出兩種疾病雖均以中華瘧蚊為宿主，在臺灣西部平原的分布範圍卻相當不同(圖三)。此外，二次大戰後農村地區水體污染日趨嚴重，導致子孓、魚蝦、貝類的消失，當與瘧疾與吸蟲症快速消失有關。

從 2007 開始，臺史所環境史研究群在劉翠溶的指導下，執行主題計畫〈近代臺灣與中國東南沿海地區之環境變遷與寄生蟲症感染變化〉。該研究即假設農業轉型使用之農藥與工業化後的汙染，可能導致某些寄生蟲中間宿主的消失，因而在當代的東亞出現某些熱帶疾病感染率下降。計畫執行之目的在於了解特定區域內某些寄生蟲病感染率變化，與其宿主存活之環境條件間的關係。但也因為如此的連鎖反應關係十分複雜，此一領域之環境研究勢必高度仰賴跨學科的合作。從生態的觀點來研究寄生蟲與宿主的關係，必須要能掌握當前寄生蟲學在利用電腦工具以及流行病學上的貢獻。長庚大學基礎醫



圖一 劉翠溶·伊懋可編《積漸所至：中國環境史論文集》(臺北：中央研究院經濟研究所，1995)



圖二 劉翠溶編《自然與人為互動：環境史研究的視角 (*Interactions of Nature and Humans: Perspectives of Environmental History*)》(臺北：中央研究院，2008)



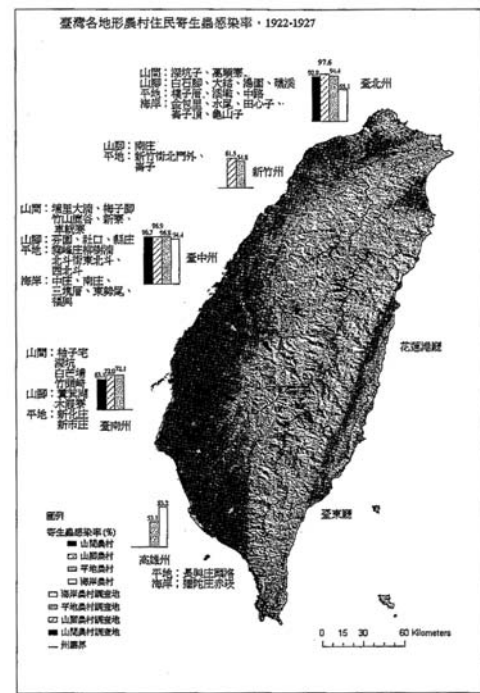
圖三(左) 1924 年台灣瘧疾案例與 1960 年血絲蟲案例分布  
資料來源：劉士永，〈從血絲蟲到瘧原蟲：從風土病類型移轉看台灣西部平原之開發〉，收入王利華主編，《中國歷史上的環境與社會》(北京：三聯書店，2007)，頁 402 及 411。



學研究所的陳維鈞教授，即為該計劃提供寄生蟲學專業知識。該計畫亦借重本院范毅軍研究員與其研究團隊，應用地理資訊系統(GIS)協助掌握大範圍的寄生蟲分佈(圖四)，以及各種時空條件下的自然環境變遷。GIS的強大功能將可應用於分析因農業轉型、城市化與工業化等因素，所導致之自然環境變遷及後續之寄生蟲病消長。

## 結論

總的來看，從1995年《積漸所至》問世，到2008年出版中的《自然與人為互動》，瘟疫與疾病都是臺灣環境史學者高度關注的焦點。但就台灣環境史研究的手法而言，雖說西方名家如麥克尼爾(William H. McNeill)的《瘟疫與人(Plagues and Peoples)》、賈德戴蒙(Jared Mason Diamond)之《槍砲、病菌與鋼鐵(Guns, Germs, and Steel)》，都是經常被提及的學者與論文，然迄今尚未出現類似其生態決定論的論點。臺灣當前在環境與疾病關係的歷史研究方面，採取比較中立的作法：把疾病的發生與消失，視為環境變遷之關鍵指標，而非決定歷史走向之原因。因為這類觀點與社會達爾文主義(social Darwinism)過於接近，不僅在科學論述上有其虛妄性，史料上也不夠充分。研究現代化的學者曾提出「後進國優勢(late-comer's advantages)」的說法，臺灣的環境史研究雖比西方晚了二十年才起步，但也因此避免落入生態決定論的爭辯中，同時更能謙卑



圖四(右) 台灣各地形農村居民寄生蟲感染率，1922-1927  
資料來源：劉翠溶編《自然與人為互動：環境史研究的視角(Interactions of Nature and Humans: Perspectives of Environmental History)》(台北：中央研究院，2008)，頁541。

地學習、運用必要的相關知識與工具。就某種意涵來說，臺灣環境史研究當下的發展，正處於向各方借力「積漸」的階段，期待未來能成為跨學科對話的基礎，也逐步發展出不同於西學的眼光。

## 要旨

## 台湾における環境史研究

中央研究院台灣史研究所 劉士永

台湾における環境史研究は、欧米に約20年遅れて、1990年代に始まったといえる。その牽引者は中央研究院副院長劉翠溶氏である。現在、台湾の環境史研究では、寄生虫や宿主である人類と環境変遷の関連性に関心が集まっている。劉氏の指導の下、台湾史研究所環境史研究群は歴史学、寄生虫学、GISなど多分野にわたる訓練を受けた専門家を招聘し、3年計画のプロ

ジェクト「近代台湾と中国東南沿海地区の環境変遷と寄生虫感染症の変化」を共同で実施している。本プロジェクトを通じて、台湾における環境史研究を統合し、ひいては真に学際的な研究領域を創出することが企図されている。欧米の環境史研究者が直面する環境決定論の問題を回避して、台湾の研究者は生物世界と自然環境との間の関連性に焦点を合わせているといえる。

## Abstract A brief overview of the study of environmental history in Taiwan

Institute of Taiwan History, Academia Sinica LIU, Shi-yung

The study of environmental history in Taiwan began in the 1990s, some twenty years after its western counterparts. Dr. Liu Ts'ui-jung, vice president of Academia Sinica, is central to the promotion of the study of environmental history in Taiwan. Current Taiwanese scholarship focuses on the delicate relationship among parasites, human vectors, and environmental change. Under Liu's leadership, the environmental history research group at the Institute of Taiwan History has invited experts from a variety of disciplines such as history, parasitology, and geographic

information systems to work together on a three-year thematic research project entitled "Changes in the environment and parasite infection in modern Taiwan and coastal China." This project has also served to integrate the study of environmental history in Taiwan as a truly multi-disciplinary field. As compared with recent developments in environmental scholarship in the west, Taiwanese scholarship bypasses some areas of dispute and concentrates its efforts on the interaction between the bio- and natural-environments while making human activities an essential variable.

# 历史上黄渤海真鲷资源数量的变动及原因



上海交通大学历史系 李玉尚

在今天中国沿海甚至是内陆居民的食物构成中，海洋鱼类是常见的。和三十年前相比，人们餐桌上的许多鱼类并非来源于海洋捕捞，而是人工养殖。访问沿海地区年长之人，都会忆及 1949-1978 年间许多渔业资源极其丰富，如今则严重耗竭。那么，在 1949 年之前，主要海洋生物的种群、数量和分布都有什么变化？自然和人文因素在这些变化中各自扮演了何种角色？这些问题促使中国历史学亦进入到水产科学之中，进行海洋生物种群历史 (History of Marine Animal Populations) 的研究。真鲷 (Red Sea Bream Pagrus Major) 是一种分布在亚洲东海岸沿海的名贵鱼类，笔者藉由此种鱼类，揭示中国海区这一研究的意义。

东汉 (32-220) 至清代 (1644-1912) 的文集和水产志，都记载“嘉鲷鱼”(真鲷黄渤海地方种群)乃“登莱独有”之物，且数量极多。在清代沿海各县地方志中，记载嘉鲷鱼的县，亦只分布在山东的掖县至日照一线。然而，根据水产学家的调查，海州湾和莱州湾是真鲷的两个主要产卵场；在河北昌黎和辽东地区，亦有一支鱼群在此产卵和洄游。为什么人们会有“登莱独有”的认识呢？

在明代 (1368-1644)，海州湾所捕捞的鱼类，主要为中上层鱼类。清代前中期，渔民才开始捕捞下层鱼类；但一直到 1949 年之后，仍以黄花和黄鲷等石首科鱼类为主，而非鲷科鱼类。由于游往海州湾的索饵鱼群多是幼龄鱼，游向莱州湾则是成年鱼，1930 年代之前海州湾产卵场因未受到人类干扰，意外地成就了登莱地区此鱼资源异常丰富，并给人们留下了“登莱独有之”的印象。

除了海州湾产卵场未被开发外，真鲷资源数量较多还与捕捞方法有关。历史时期黄渤海渔民多采用延绳钓法，资源破坏小。清代莱州湾的真鲷鱼龄多为 3 龄以上，同治 (1862-1874) 之前的体长比 1950 年代至少长 8 厘米。渤海传统的捕鲷渔业，是 1924 年日本机船底拖网渔轮驶入真鲷渔场时，才迅速衰落。同一时期，海州湾渔场被发现，幼龄鱼遭到捕捞，真鲷资源开始受到严重破坏。

人类的捕捞区域、捕捞方式和捕捞种类直接影响了真鲷资源的数量变化；重大的自然环境变化，亦会对这种底层鱼类产生影响，兹以清代为例说明之。明末清初的气候变寒和 1855 年黄河由江苏改由山东入海，导致真鲷在渔汛时间上和分布区域上的变化。在气候寒冷时期，海水盐度增加，真鲷受精卵发育，因此渔汛时间大大提前。

黄河改道引起径流量和海岸线的变化，造成海水盐度和洋流的改变，导致莱州湾内真鲷洄游路线的西移。

和世界其它洋区的同类研究 (如 HMAP 中的波罗的海) 相比，中国海区所遇到的最大的问题是缺少连续性捕捞记录 (完整的记录是从 1949 年开始的)。但是从真鲷以及其它海洋生物的个案研究中 (如鲱鱼、小黄鱼、香鱼、鲸等)，研究者仍可以藉由连续性的历史文献，去揭示过去海洋生物的变化，探究其原因，并最终“复原”历史时期中国海区的海洋生态系统。



图 1 真鲷



图 3 真鲷洄游路线 (据里内森三郎和笠原 昊之研究，引自《东、黄海底层鱼类资源的研究》)

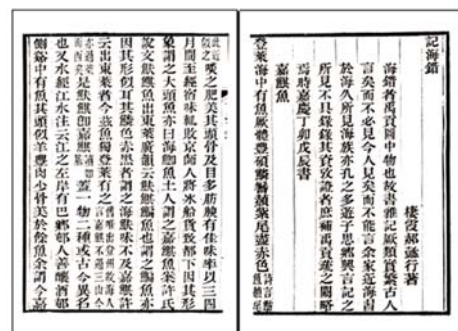


图 2 清代山东水产志书《记海错》记录“嘉鲷”

# 天地と対話する身体 ——中国医学の伝播と独自化



茨城大学大学院人文科学研究科 真柳 誠

後漢時代に基本古典が成立した中国医学は、天地と対話する身体観をベースに生理・病理や治療を論じ、実践してきた。つまり天地—風土が異なれば、人々の身体—体質・気質が異なり、疾病構造も治療も異なると考えてきた。それゆえ漢字文化圏のベトナム・朝鮮半島・日本では、子細に見ると相互にかなり異なる中国系伝統医学が現在行われている。

他方、漢字文化圏の現存古医籍を私がここ数十年悉皆調査した結果、かつて誰も気づかなかった共通の歴史現象が浮かび上がってきた。これは各国の独自化を代表する近世の医書、日本の『啓迪集』(1574)、韓国の『東医宝鑑』(1611)、ベトナムの『医宗心領』(1780)に共通する以下の諸点である。日韓越の各書は各々一人の医家が体系づけた医学全書で、自国を中国と区別する意識が見える点。各書が多く引用する中国書も共通し、それらは明代の一人の医家が著した医学全書で、みな自己の学説と地域差を強調する点だった。日韓越の医学は、共通の意識とモデルに基づき独自化を進めていたのである。

にもかかわらず、現在の日韓越には上述の相違がある。むしろ各国が固有に独自化したからでもあるが、もう一つの要因もあった。韓国とベトナムでは近世に独自化した医療が今なお行われているのに対し、日本では江戸中期より中国古典

医学の重視で再度の独自化が進行し、これが現在の臨床に影響しているからである。私は以前、そうした臨床上の相違はあっても、各国とも同様に古典医学を研究していただろうと思っていた。しかし調査の完結が近づいた今、中国以外の漢字文化圏で古典医学に傾倒してきたのは日本だけ、という不思議な現象も史実として確信できるようになった。

これには以下の要因が想定できる。日本だけ唯一島国で中国との往来が困難なため、難解な医学古典も独力で研究したこと。中国の支配が唯一なかったため、中国文化の根源まで親近感やあこがれを持ち続けたこと。科举制度を唯一採用しなかったため、学医は士農工商をすり抜けて高い地位を得られたため、古典医学が研究されたこと。中国以外で唯一、江戸期は都市を中心に商業出版が盛行し、古典や研究書の普及が一層の研究を促したこと。以上の要因が複合的に作用し、江戸中期から再度の独自化が進行したのである。

中国医学は原初から環境と疾病の関連を認め、これを受容した日韓越は共通の意識・モデルと、異なる風土に基づき独自化を成し遂げていた。日本でのみ更なる独自化が進行した要因も見出された。より解析が進めば、漢字文化圏医学の史的共通性と、各国固有の現象がさらに浮かび上がるだろう。

## 摘要

## 与天地对话的身体——中国医学的传播与独特性

茨城大学大学院人文科学研究科 真柳 誠

中国医学从一开始便承认了环境与疾病的关联。通过调查汉字文化圈日韩越的古代医学书籍，有了新的发现：近代各

国都通用并接受了这种强调地域差异的明代医书，并各自发展，独具特色。还找出了只有日本实现了进一步独立发展的要因。

## Abstract

## Bodies in dialogue with heaven and earth

The diffusion and developing uniqueness of Chinese medicine

Graduate School of Humanities, Ibaraki University MAYANAGI, Makoto

From the beginning, Chinese medicine has recognized the connection between the environment and disease. Based upon research regarding old medical records for Japan, Korea and Vietnam which lie within the Chinese character cultural sphere, new knowledge was obtained

that each of these countries shared in common their acceptance of the Ming Dynasty books on medicine that accentuate regional differences and promoted uniqueness. The primary factors which advanced a further uniqueness that is singular to Japan were studied as well.

# 山形と中国ドキュメンタリー



山形国際ドキュメンタリー映画東京事務局ディレクター 藤岡朝子

2007年10月のとある日、山形県上市市・古屋敷村に中国から10人ものドキュメンタリー映画作家と映画関係者が集っていました。

上市市の農村部は、小川紳介率いる小川プロダクションが1970年代から80年代にかけて稲作をしながら記録映画作りを続けた土地で、特に古屋敷村は1982年制作の映画『ニッポン国古屋敷村』で知られています。過疎化の進む当時の日本の農村を捉えたこの作品の完成後、この村に住人はいなくなりましたが、茅葺きの民家がそのまま保存され、民具資料館や農村

詩人として知られる真壁仁記念館が現存しています。川は美しい溪谷になっていてヤマメやイワナが棲み、最近は音楽やアートの発表の場、織物のアトリエとしても使われています。

中国からの映画関係者たちは、1989年より開催されてきた山形国際ドキュメンタリー映画祭（YIDFF）の第10回目に参加するために来日していました。ドキュメンタリーというジャンルに特化した国際映画祭としてはアジアで初めてで、現在も最大級の規模で開催されているYIDFFは、とくにアジア・ドキュメン



写真1

タリーの登竜門としての知名度が高く、河瀬直美やアピチャップン・ウィーラセタクンなど、ヤマガタから世界へ飛び立った映像作家は少なくありません。おかげで「ヤマガタ」の名はとくにアジア諸国の映画関係者の間でよく知られるところとなり、『ニッポン国古屋敷村』を見ていずとも、小川紳介の評伝を読んで牧野村や古屋敷村を「ドキュメンタリーの聖地」と憧れる人も少なくありません。今回の訪問は、元小川プロのスタッフの方に案内をされながら、地元古老たちの話を聞かせてもらう有意義なものとなりました。

写真（写真1）に写る監督たちの中で、数日後の表彰式で舞台に立つことになった人が2名もいます。グランプリを受賞したのは王兵監督の『鳳鳴——中国の記憶』でした。ひとりの老女が反右派闘争や文化大革命の粛清運動で数々の迫害を受けた壮絶な人生をひたすら語るに聞かせる凄烈な作品です。王兵監督は9時間にも及ぶ前作『鉄西区』でも、2003年度のグランプリを受賞した優れた作家です。

もう一人はアジア部門の大賞「小川紳介賞」を受賞することになった馮艶監督です。彼女が7年以上かけて完成させた『長江に生きる 兼愛の物語』は、三峡

ダム建設で水没する村で、移住政策も補償金も拒否して生きようとする一人の貧しい女性とその家族を描きました。この映画は2009年春より日本全国で一般公開されています。

近年は中国ドキュメンタリーの成熟に目を見張るものが多く、デジタル革命の恩恵もあって年間100本以上ものドキュメンタリーがYIDFFにも応募されます。中国の変わりゆく現実を個人の目から見つめ、政治や市場性にゆるがない姿勢で記録をしていく才能と意欲あふれる制作者たちが、今後も山形に集い続けることはまちがいありません。

今年の10月には、願わくば古屋敷村で合宿する「日中ドキュメンタリー映画道場」をやれないだろうか、と計画しています。日本と中国の映像作家たちを迎え、デジタル時代で個人化の著しいドキュメンタリー制作しか知らない若手と、専門的な技能と経験を積みながら集団の中で記録映画を作っていた日本のベテラン映画人たちが交流する企画です。この山形という地域から世界への新しい窓を開けられないだろうか、新しい挑戦です。

## 摘要

## 山形与中国纪录片

山形国際纪录片电影节東京事務局负责人 藤岡朝子

2007年10月的一天，10位来自中国的纪录片制作人和电影工作人员来到了山形县古屋敷村。20世纪70年代到80年代，纪录片电影导演和小川制片公司在这里一边种植水稻，一边坚持拍摄纪录片，这片土地因此而闻名。中国的电影工作人员来日本是为了参

加亚洲规模最大的山形国际纪录片电影节（YIDFF）。在数日后的颁奖典礼上，2名导演登上了领奖台。计划于今年10月在古屋敷村举办日本和中国的影视制作人交流的纪录片研讨会。

## Abstract Chinese documentaries at the Yamagata International Documentary Film Festival

Director, Yamagata International Documentary Film Festival Tokyo Office FUJIOKA, Asako

One fine October day in 2007, ten Chinese filmmakers and cinema-related people visited Furuyashiki Village in Yamagata Prefecture. This area in northeastern Japan is known for its affiliation with the documentary filmmaker Ogawa Shinsuke and Ogawa Productions, an important film collective that made films and farmed rice in the same rural community during the 1970s and 80s. The Chinese filmmakers and critics were in Japan

to attend the Yamagata International Documentary Film Festival, one of the largest of its kind in Asia. Two of the filmmakers had won prizes a few days later, proving that Chinese documentaries are at the cutting edge of international cinema today. This writer is planning a documentary workshop in Furuyashiki in October 2009, where Japanese and Chinese filmmakers can experience a fruitful cultural exchange.

# 彼女は安価な労働力になりたくなかった

ドキュメンタリー『長江にいきる』監督 馮 艶



16年の歳月を経て、いま、三峡ダムが完成されようとしている。この世界最大と誇る水利プロジェクトの背後には、無数の数字が隠れている。その中の一つに、140万人という世界にも例の見ない規模の移住者の数字がある。湖北省桂林村に住む農婦の張秉愛(チャン・ビンアイ)さんもその中の一人である。彼女は村外への移住が要求されたが、始終故郷を離れることを拒んでいる。拙作ドキュメンタリー『長江にいきる』は、彼女の7年間の孤独な戦いを記録したものである。彼女が移住したくない理由はとても現実的なもの(旦那さんの病気、都市生活への不安)であるが、彼女が川辺で畑で、働きながら、なんの気もなしに、「人の魂は、

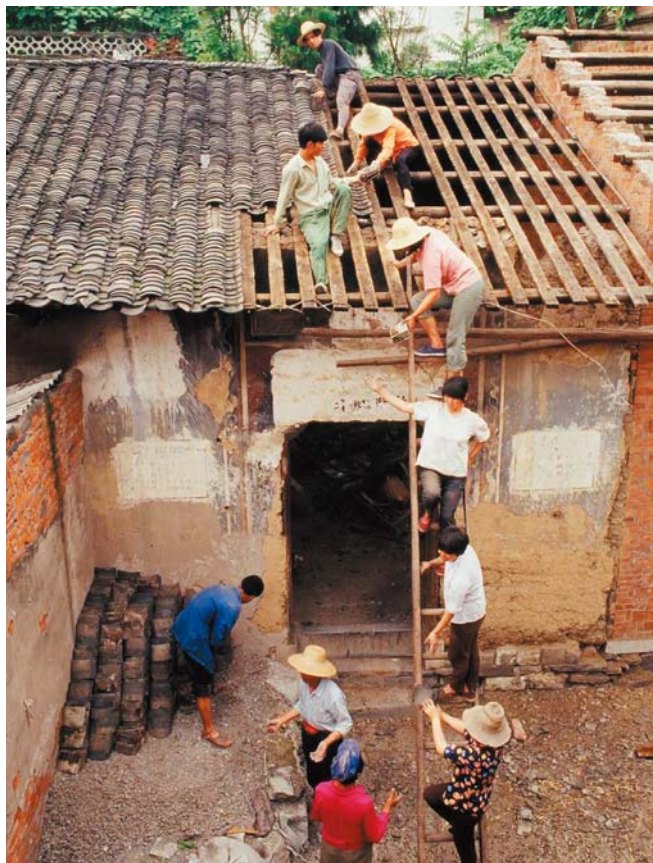
体ほど簡単に動かないのだと思う」と語る時、その素朴な言葉に、思わず唖ってしまう観客が多い。

私が三峡地域で出会った農民の中で、秉愛さんのような人は珍しい存在である。多くの農民は、ダムによる移住に、豊かな生活を手にする希望を託していた。ダム建設をめぐる論争は50年以上続き、いつ水没するか分からない状況の中、政府がこの地方への投資を最低限に抑制していた。そのため、三峡地域は、豊かな水路のほとりにありながら、中国で一番貧困な地域の一つであった。

改革開放後、沿海地域の目覚ましい経済発展と対照的に、ここは資金も技術力も人材もないまま、都市と



「長江にいきる」のポスター



移住者の家の取り壊し。住む家を取り壊してからはじめて補償金を手に入れられる。(96年、湖北省桂林村で撮影)

の格差が日ごとに増していきばかりだった。ましてや戸籍制度のため、農村戸籍の人は都会へ出稼ぎに行けても、都会戸籍をもらえず、子供の就学など、多くの現実的な問題を抱えている。しかし、ダムによる移住政策の補償金を利用すれば、都市戸籍を買うことができる。これは、多くの若い人には、大きな魅力があった。

中国では、土地の公有制は農民が土地に対する未練が少ない理由の一つだと言われるが、秉愛さんにとっては、土地は彼女の伴侶のように、ロマンティックな愛がなくても、手放すことのできないものである。土地に頼る生活は苦しくても、これまでに唯一「酬いてくれる」ものである。文化大革命でろくに勉強できなかったり、不本意な結婚だったり、「一人っ子政策」で何回も墮胎せざるを得なかったり、彼女の人生の中

で、自分で決められることは何一つなかった。だが、土地だけは「何でも育ててくれる」貴いものである。村外移住の保証金が多くてもいずれなくなるものであるが、土地があって、それを耕せば、食べるものがあり、「尊厳」をもって生きていくことができると彼女が思うのである。

改革解放後の中国は、資本の本源的蓄積の段階にある。労働者を搾取し、都市の高速度の発展も、農の崩壊を代価にしている。このような潮流に押されて、三峡ダム建設による「開発型移住政策」も結局、生計手段を失った農民たちを都市に押し出し、安価な労働力になることで終わろうとしている。「尊厳」が「生計」に遭遇するとき、多くの人が「生計」を選ぶ中で、安価な労働力になりたくない秉愛さんは、一層尊く見えた。

## 摘要

## 她不想成为廉价劳动力

纪录片《秉爱》导演 冯 艳

经过长达 16 年的建设，三峡工程即将完工。这个号称世界最大的水利工程的完成，是以 140 万移民失去家园为代价的。政府的“开发型移民政策”并没有给失地农民带

来更多利益，而是以大多数农民涌入城市成为廉价劳动力，为资本的原始积累提供了更多可以榨取的对象。

## Abstract

## She didn't want to be part of cheap labor

Director of documentary *Bingai* FENG, Yan

After 16 years' construction, the Three Gorges project is to be completed very soon. This project, known as the biggest hydro project in the world, was constructed at the expense of 1.4 million of immigrants who lost their homeland. The “Developmental

Resettlement Policy” did not give the immigrants much benefit. However, most peasants who lost their land rushed into cities, only to become cheap labor who were acutely exploited in the process of primitive accumulation of capital.



三峡ダムが建設される前、長江流域では、小さな渡り舟は村の間を繋ぐ主な交通手段でした。(94年、奉節県で撮影)



移住者は家財道具一切を船に乗せて、新しい移住地に向かって行く。(この船に乗ったのは、湖北省西陵峡村の移住者で、彼らの移住先は、下流域の100キロあまり離れた董市鎮である。96年撮影)

# 消えゆく水と現れる碑——環境社会史研究の可能性



京都大学・非常勤講師  
井黒 忍

2007年の夏から秋にかけて、私は汾河流域の水利関連碑刻の調査を目的として山西大学中国社会史研究中心（太原市）で在外研究を行った。期間中には

清潔な水をたたえる水源池を皮切りに、黄土を包摂した汾河が黄河に流入するまでのほぼ全域をたどることができた。中でも印象深いのは、研究中心の張俊峰副教授とともに実施した最下流域の稷山県の調査である。

11月初め、われわれは稷山県の黄華峪を訪れ、最上流部に位置する張開西村の村長に聞き取りを行った。村長の話によれば長らく隣村との間で水争いが続いたが、80年代から水源となる泉水が枯渇争うべき水自体がなくなったため争いも自然となくなった。現在、飲み水はもっぱら村外からの売水に頼っており、水条件の悪化した張開西村には嫁の来手も少なく、男達は出稼ぎに出て生計を立てているとのことである。“主要是水的问题”という言葉が心に残った。

同村の北側に位置する黄華峪ダムを見学した後、県内東部の晋家峪ダムに向かう。両者はともに50年代末に毛沢東の主導によって始まった農工業の大増産政策（大躍進）によって建設されたものであり、すでに老朽化して至るところから水が染み出している。また、黄華峪と同様に晋家峪でも水不足は深刻であり、中流部の李老庄村には3ヶ月の間、晋家峪からの水が来ていないという。同村に至ったわれわれは口々



左から、(1) 民国3年の水利碑、(2) 掘り起こされる石碑、(3) 黄華峪ダムの現状

にその不満を訴える村人達に取り囲まれることとなった。

そのうち、一人の老人が水利に関連する石碑が旧関帝廟にあると言い案内してくれた。入り口脇には民国9年（1920）の石碑2基が立ち、室内にも巨大な民国3年（1914）の石碑が東西両壁にはめ込まれている。ともに水分配に関する規程を記す。老人はさらに別の石碑があると言って地面を指さした。知らぬ間に集まっていた村人達が地面を掘り起こすと、瞬く間に2基の石碑が現れ出た。一方は民国14年（1925）に水争いを解決するため、隣村との間で互いの水と土地を交換することを取り決めた契約書を刻んだものである。もう一方は、清代光緒2～3年（1876-77）に山西省全域を襲った大飢饉とその惨状を記したものである。

これまでも地下に石碑が埋められるという事例を見聞きしたことがある。文革時の緊急措置として現地の人々が自主的に行った場合が多いようだ。地域の具体的状況を記録するこれら石碑が再び日の目を見ることになれば、環境と社会との歴史的相互関係を考察する環境社会史研究の可能性もさらに広がるであろう。しかしながら、現在では当時の状況を知る人々は年老い、若者はまったく関心を示さないという話を聞きながら、黄華峪と晋家峪のダムの現状が目につかんだ。あるいは、押し寄せる水と埋もれ行く石碑こそが近い将来の姿を言い当てているかも知れない。

## お知らせ

・2010年1月に京都市で現代中国地域研究拠点連携シンポジウム「環境問題：現代中国の未来可能性」を開催します。詳細は拠点ウ

ェブサイト (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) または現代中国地域研究ウェブサイト (<http://www.china-waseda.jp/>) をご覧ください。

## 最新动向

・2010年1月、我们将在日本京都市主办当代中国地区研究基地联合项目第三届国际会议「环境问题：当代中国的未来可能性」。详细

情况请看我们基地的网页 (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) 或者当代中国地区研究的网页 (<http://www.china-waseda.jp/chinese/>)。

## Currents

・On January, 2010, NIHU Network of Contemporary Chinese Studies will sponsor the international symposium “Environment issues: the futurability of Contemporary China” in Kyoto, Japan. For additional

information, please see the RIHN-China website (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) or the Network of Contemporary Chinese Studies website (<http://www.china-waseda.jp/english/>).

発行日 2009年11月25日

Date of Issue 25 November, 2009

編集・発行

Edited and Published by

中国環境問題研究拠点

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto 603-8047 Japan

総合地球環境学研究所

Research Institute for Humanity and Nature

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

TEL : +81-75-707-2462 FAX : +81-75-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

製作・勉誠出版

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.